

ムーンメモリア・ロストノイズ
二十二話・竜との遭遇

雨和七瀬

曇り空に岩と粘土の地面で灰色一色の光景が続いていると、それ以外の色というものはブランカにとって一層際立って見えた。

「あれは……トカゲですか？」

四つ足で這うように歩く、赤を基調とした姿の生き物がちようどこちらに向かってきていた。その姿は以前戦った魔物、アオガネトカゲを彷彿させるシルエットであり、ブランカは薙槍の柄を握った。しかしそれを見てライは慌ててブランカを止めた。

「ちよいちよい、駄目っすよブランカさん。あれは魔物じゃなくて竜っす」

「あ、あれが竜……」

そうは言われてもトカゲと何が違うのか、ブランカにはいまいちよく分からなかった。それでもライの慌てようを見て槍を下げた。そうしているうちにも、蜥蜴のような姿をした竜はどんどん近づいてくる。よく見ると細かな違いが見えてきた。鱗よりもごつごつとした皮の方が目立ち、そして鋭い歯が何本も生えている。

「……でもあれ、火吹きワニじゃね？」

ユノが怪訝そうに呟くと、ライは「何言ってるんすか！」と青ざめた顔で反論した。

「どう見ても竜っすよ、あの皮膚、額の文様！ どこをどう見たら魔物に見えるんすか！」

「はあー？」

喧嘩腰になってきた二人の間に入ったルークは「説明が難しいんだが……」と言って少し考えて、目の前にやってきた大きな口のトカゲなのか竜なのかワニなのかよく分からない存在について説明を始めた。

「竜域の外ではユノの言う通り『火吹きワニ』という魔物なんだが、ここではライの言うように竜の証を持つ竜弓類が全てこの領域の民、『竜』として扱われる」

ブランカは説明を聞いてもまだピンとは来ないものの、トカゲではないということは理解した。ふとブランカが足元を見ると、火吹きワニ……じゃなくて竜が神妙な顔つきでルークを見上げていた。

(……ルークさんの言ってること、分かっているのかな)

純粋な疑問が頭に浮かぶ。するとルナがどこからともなく姿を見せた。ルナはブランカの視線の先、火吹きワニの鼻の上に留まった。

『竜と話してみたいの？』

(え、竜って話せるの?)

ブランカは目の前の竜が流暢に言葉を話す姿を想像したが、ルナは『そんなわけないでしょ』と笑った。

『今キミと意思疎通しているのと同じことが竜相手でもできるから通訳してあげるよ。今ねえ……』

ルナが何か言おうとしたとき、火吹きワニはグルグル……と唸りだした。それに気づいていなかった三人は驚いて竜と距離を取った。

「うおっ、こんな近くまで来てら……ほんとにオレ達を攻撃してこないんだよなあ？」

ユノは咄嗟に銃に手を伸ばしていたが、掴むことなく手を降ろした。ライは早々に手を上げ、戦闘の意思が無いのを示し、ルークは竜の一挙手一投足を観察していた。そんなことはお構いなしに、ルナがひとり談笑しているのをブランカはじつと眺めていた。

『あはは、ごめんごめん。この子がキミと話せるのかなーって言うからさ。何か言いたい事とかあれば伝えるよ』
竜は鼻先に居るルナを顔の側面にある目を必死に動かして見ていた。その顔を見るとブランカは少し可愛さを感じて頬が少しだけ緩んだ。

『ふんふん、分かった。ありがとねー。……ブランカ、「竜城へようこそ、魔物がいっぱい居るから気を付けて」だつてさ』

「は、はあ……」

その心配をしてくれる相手を魔物と勘違いしてしまつた手前、ブランカはどんな顔をすればいいか分からなかったが、感謝をするべく竜の前でしゃがんだ。

「あ、ありがとうございます」

竜は目の前でぺこりと頭を下げたブランカを見て、同じように頭……顎……を下げると、前足を片方上げて横に振り、そのままノシノシと歩いて去っていった。

『ちゃんとありがとうございます偉いねえ』

いつの間にかブランカの目の前に戻ってきていたルナがブランカを茶化した。

（もう、子ども扱いして……）

ブランカがそれに対し口を尖らせていると、ユノが驚いたように駆け寄ってきた。

「ブランカ、おま、竜と話せんのか!？」

不意に肩をガツと掴まれ、ブランカは言葉に詰まった。助けを求めてルナの方を見ると、『なんとなく、とかで誤魔化しちやえ』と適当なことを言ってきた。

「……なんとなく？」

他に良い案もなく、ブランカはルナの言ったとおりの言葉を口に出した。ユノも、後ろに居たルークも真剣な表情で次の言葉を待っている。

「竜と意思を交わせる……って、竜巫女サマだけつすよね？」

「……言葉操る竜も居なくはないが、あの竜にその様子は無かった。もしかして……」

あらぬ誤解を生んでしまい、どう修正するかとブランカは思考を巡らせた。

(多分そうじゃないこと確定って感じだけど、ルークさんたちに言える根拠が、ない……!)

この事態をどう收拾するか、またルナに聞こうと探したが、いつの間にかやらルナは姿を消していた。(んもろっ、武器屋さんでも口を出してきただけだし、本当に助けてくれるつもりあるの!?)

「ほ、本当になんとなくですってばあ……」
ブランカは隠し事をしてる罪悪感もあり、段々と声が弱々しくなっていた。

それからしばらく歩いている間ずっとユノとルークは小声で話し込んでいた。当然、内容はブランカの出自についてだった。

「……だがやはり、竜の証が無いのと矛盾する」
「体のどつかにあるのを見落としてたとか……」

ブランカは後ろの二人の会話が傷口に塩を塗り込まれるようにズキズキと罪悪感に拍車をかけていく。

「あ、あのう!」
居た堪れなくなったブランカはライに話しかけた。

「なんすか、ブランカさん」
幸いライはブランカの事を深掘りするつもりは無いよう、何てこと無いように耳を傾けた。

「さっきから話に出ている『竜巫女』……さま? って何でしょう?」

ライは「なんだ、知らないんすか」と少し驚いた。
「竜の証を持って竜と一緒に暮らしながら、人間と竜の通訳をやってる人達っすね。たまにうちの村にも来るんすよ」

「竜と一緒に暮らす……」
一瞬カッコいいと思ったものの、本の挿絵にあった有翼の竜だけではなくことを思い出して、竜と意思疎通ができるなら案外普通の生活かもしれないと思直した。

「大変そうっすよ。男手が無いから、魔法が使えない竜巫女は『洞穴暮らしだー』って愚痴ってたし」

「ほ、本当に大変そう……!」
話が盛り上がってきたところで、後ろに居た二人も会話を混ざってきた。

「ルークがたまに竜域に行ってたのって、竜巫女の手伝いだったのか?」
ユノは軽い気持ちで聞いていたが、ルークの顔はみるみるうちに険しくなった。

「……嫌というほど頼まれるが断っている。竜域に行つたのは竜洞城に呼ばれて……賢竜殿の産卵記念で方位魔針を贈ったのが最後だな」

ルークの何気ない言葉に、ライは目を丸くした。

「それって国王からの祝いの品って聞いたんすけど……
そんなお偉いさんだったんすか。ブランカさんみたいに
もう少し丁寧に喋った方がいい、デスか？」

「支障をきたさなければ好きにしろ」

ルークはライのぎこちない物言いに簡単に返すと、また
一歩後ろで黙考し始めた。それを見て、ライは少し顔を
青くしてユノに目配せするも、ユノは「言葉通りの意
味しか無えさ」と一笑した。

「ならいいんすけど……」

ライはそう言いつつも顔は納得しておらず、ブランカ
に近づいて耳打ちする。

「ユノさんああ言ってますけど、本当すか」

ブランカは聞かれて初めて考えてみたが、ルークと話
す相手がユノ以外ほぼ全員かしこまっていたのを思い出
し、首を傾げた。

「どうなんでしょう……？ ルークさんが偉いかどうか、
考えたことも無かったので」

「……お二人が良い人で良かったっすね」

ライは絞り出すような声で呟くと、黙り込んでしまっ
た。

静かになった荒野。視界の先には、窪地から真つすぐ
な強い光が雲を破ろうとしているのが見えた。

〈二十三話へ続く〉